ChatGTP や MT（機械翻訳）の問題点

Commented by Shino

ChatGTP や MT（機械翻訳）などの普及により、「大体意味が分かれば OK」的な雰囲気がありますが、読みやすさ、正確さの点でヒューマン翻訳には及ばないと思っています。

現在主流となっている、TRADOS 内での作業事例を挙げてみたいと思います。

TRADOS にも機械翻訳（あるいは翻訳補助）的なプラグインが導入されましたが、それを利用しても「ここではそれは、違うんだよなあ」ということが多々あります。機械翻訳は一文一文の典型訳を生成する仕組みですが、そのブツ切りの 提案訳を繋げても、縦の流れが悪くなるので、その点は調整が必要です。同じような文章が続いて単調にならないよう、また、話の流れがよどみなく自然に進むよう、接続詞を補ったり、前の文章の言葉を受けたりして、読者視点での読みやすさを追求します。

訳文の適切性という点では、例えば「XX パラメータを設定する」という一文があったとして、機械翻訳にかけると典型的なものとして「Set the XX parameter.」という訳文が提案されます。これは誤りではありませんし、それが適切である可能性もあります。
しかし、私（人間）が訳す場合は、その「XX パラメータを設定する」というテキストがどのような状況で表示されるものなのか、まずそれを見て検討します。同じ「XX パラメータを設定する」でも、下記のような状況があり得るからです。

1. 「XX パラメータを設定する」という内容のセクションのセクションタイトル（見出し）である
2. これから XX パラメータを設定する説明を始めるよ、という手順説明前の前置きの一文である。（この後にステップ 1、2、3...と続く）
3. ユーザーに XX パラメータを設定することが今まさに求められている（具体的な操作の指示である。ステップの１つ。）
4. イラスト等の図に配置されるキャプションである

機械翻訳が提案した命令文「Set the XX parameter.」は 3. の場合には正解となり得ます。
1. の場合は「Setting the XX parameter(s)」「Configuring the XX parameter(s)」「XX Parameter Setting」など、動名詞や名詞の形とするのが適切と考えられます。また、文頭の頭文字のみを大文字にする、各単語の頭文字を大文字にする、全部を大文字にする、などの表記スタイルは、その文書全体の他の同レベルのセクションタイトルと合わせる必要があります。
2. の場合は、前後の状況にもよりますが、1. のタイトルと同様のスタイルで動名詞にすることもありますし、「The following shows how to set the XX parameters.」「Here is how to set the XX parameters.」「Below is how to set the XX parameters」のように、「下記に XX パラメータの設定方法を示します」のような表現に敢えて意訳する場合もあり得ます。
4. の場合は、示されている状況により異なりますが、動名詞が適切な場合もありますし、図中テキストなので「Set the XX parameter」とピリオドを省く判断もあり得ます（これは文書全体のトーンとクライアントの意向に合わせます）。

つまり、機械翻訳は、正解「かもしれない」訳文を（場合によっては複数）提案しますが、実際には全体におけるそのテキストの位置づけによって最適な訳文は変わってくるわけで、機械翻訳を利用する場合でも下記のプロセスはどうしても人間がやらなければならないわけです。
〇提案訳が正解かどうかを判断する
〇複数ある提案訳の中で最も状況にそぐうものを選択する
〇どれも状況に合わない場合は別の訳文を作成する
〇必要であればそれが正解であることの裏付けを取るための調査をする
〇前後の状況に合わせて読み易いよう調整する

（UI など、 実際に表示される内容が確定している可能性がある時には固定訳がないか、実際の画面キャプチャなどで確認を取る。実機があれば動作確認を行いながら裏付けを取る）

さらに補足するなら、機械翻訳では実現しにくい翻訳結果の１つに、周囲の状況をヒントに単数・複数を正しく判断して訳文に反映させる、というのもあります（日英の場合）。
１つ１つの典型訳を出力するタイプの機械翻訳だと、どちらかを当て推量で出すしかありません。TRADOS などのメモリを活用する翻訳アシストツールでも同じで、登録されている訳文ベースで単一的に提案します。その登録訳はその状況にそぐうとは限りません。そこは翻訳者が状況を見て判断して直していかなければならないわけです。
一方で人間の翻訳者は、常連のクライアントであればこれまでのその製品に関する知識と、その文書内の他の箇所や図で出てくる状況から、１つの特定のパラメータを指しているのか、複数の一連のパラメータを指しているのかを、俯瞰的に判断できます。ここで問われるのは人間の判断力です。私はその判断力ゆえに翻訳のご依頼を受けていると思っています。もしくは、判断がつかない時には、調査をして突き止めるためにご依頼を受けていると思っています。

些細なことに見えますが、こういう適切性および不適切性は、読者の理解度と違和感に影響を与え、ボディブローのように全体に効いてくると思っています。読者が何の違和感もなく、状況を頭にイメージしながら、もしくは手持ちのソフトなり実機を見て照らし合わせながら、フムフムと何の疑問も抱かず納得して読み進められるのが理想だと思っています。「？」と何かが引っ掛かって読み返すことをさせない、二度読ませない翻訳を個人的には目指しています。

このように、機械翻訳のみでは正解となり得る訳文の羅列にすぎませんし、それを利用するとしても適切な判断をして完成度の高い文書に仕上げていくプロセスに長けているのは、やはりプロの翻訳者であると考えます。

上記のような理由もあり、翻訳者による質の高い翻訳サービスをお薦めします。
ユーザー（読者）の目線に立って、縦に読み易く分かりやすい文書を作る、というのは、かつてユーザー向けのドキュメントを作る側の人間であった翻訳者として、私自身こだわってきたことですから。